

3章 過去に責任を持つこと  
—南アフリカの経験をもとにした理論的・教育的考察—

担当：太宰府市立太宰府西中学校 高松尚平

## 著者紹介

### Sirkka Ahonen



#### 【所属】

ヘルシンキ大学 教育学研究科

#### 【研究テーマ】

教育学，歴史教育，歴史認識，歴史的アイデンティティ，教師教育

## 主な著書

- ・ Ahonen, S "Form or substance? weighing critical skills against identity narratives in history education", in Berg, C. W. & Christou, T. M. (eds.), The Palgrave Handbook of History and Social Studies Education.
- ・ Ahonen, S, " The construction and deconstruction of national myths: A study of the transformation of Finnish history textbook narratives after World War II", In European Politics and Society. 21, 3, p. 341-355.

詳細は，<https://researchportal.helsinki.fi/en/persons/sirkka-ahonen>

## 重要語句

社会的記憶 (Social memory)

…本章では，歴史文化と対比される形で，南アフリカの言語での生きたコミュニケーションの中で構築される過去の表象とされている。

現地で用いられる言語 (vernacular)

歴史的アイデンティティ (Historical identity)

虹の思想 (rainbowism)

## 議題

- 歴史的正義という概念の範囲，他の章と比較した時の意味合いの共通点・相違点
- 教科書の物語の構造と社会において語られている過去の物語の構造（生徒も触れている物語の構造）が，内包する正義が矛盾した際，歴史カリキュラムの形成では，歴史の授業では，どのように向き合うことができるか

## 1 はじめに (pp.47~49)

あるコミュニティにおいて、過去についての表現は社会的記憶 (Social memory) と歴史文化 (the culture of history) という2つの領域で生まれ、道徳的な裏付けをもって理解される (英雄なのか、貢献したのか・罪なのか、損害を与えたのか)

⇒つまり、過去についての表現と正義は切り離すことができない、歴史的正義の概念

しかし、分裂した集団において歴史的正義は、過去をどのように理解するかという点で問題化  
南アフリカを事例に、社会的記憶と歴史教育の密接な関係を認識し、2つの領域における過去の倫理的判断の役割について研究。

## 2 南アフリカ共和国の歴史学における道徳的語りの対立への対処

### —ポストアパルトヘイトの歴史学の動向— (pp.50~53)

南アフリカの人々は、2つの大きな歴史物語 (①黒人中心の物語②ボーア人中心の物語) を継承

| ①黒人の物語  | ②ボーア人の物語   |
|---|--|
| …1980年代、黒人の歴史家たちによって語られたもので、アフリカの上昇と黒人の歴史的主体性を明確に語ったもの。アフリカの部族は単に人類学的な関心の現れとして語られていたものが、アフリカ人は国家の創始者として語られ、被害者性とは別に積極的な行動や抵抗を強調 | …1652年、ケープ半島に上陸したオランダ人が農民として定住し、先住民を文明化する使命を担って国造りがスタートしたというもの。その後イギリス帝国軍による侵攻に苦しめられ、ボーア戦争を被害の頂点として描いている |

1961年、黒人の抵抗勢力による武力闘争をきっかけに、アパルトヘイト政権と黒人の内戦へ  
両コミュニティの議論には、ともに「正義の戦争」という概念が含まれていた

1994年の多数決への移行…指導者たち統合されたアイデンティティの必要性を認識

すぐにアイデンティティの共有が困難だと明らかに、歴史的正義は抑圧、被害者意識、罪悪感といった概念を用いた意味付けで構成されるようになった

⇒国民党とアフリカ民族会議は対立する2つの物語を同等に認めるよう強調、歴史教育の領域でも和解が目指される

マンデラ以降の政策では、2つの物語が並立しないことを認め、アフリカ主義を中核に据えた新たな政策、歴史的アイデンティティの構築を進める

(例) 博物館では人類上昇の発祥地としてのアフリカの役割と、歴史の意識的かつ積極的な行為者としてのアフリカ人を強調、ダイナミックな歴史的なプロセスとして提示

⇒歴史物語は「歴史の所有」、「過去の不正の認識」、「正義の戦争」、「解放の戦い」、「贖罪」という概念で構成されている

さらに、2000年代に入り、若い黒人たちが社会経済的な進歩の遅れに不満を募らせるようになった時期に勢いを増した

### 3 真実和解委員会における社会的記憶を構成する倫理的概念 (pp.53~59)

#### 概要

分析対象…真実和解委員会 (Truth and Reconciliation Commission) の取り組み

政府の和解政策であり、アイデンティティ政治と教育の一大プロジェクト

TRCの聞き取りの目的は、和解と社会的治療

加害者の悪行や被害者の痛みなどが具体的なエピソードの中心

南アフリカの住民が経験を語る事ができるようインタビュー形式で実施、全国で開催され、22000人以上から裁判の申請

#### 真実和解委員会の倫理規定

報復と補償という司法原則を採用する代わりに、復讐の負のスパイラルを断ち切るためキリスト教の赦しを促す

恩赦は組織ではなく、責任ある行為者としての個人のみを与える

赦しは最終目的であるが、申請者は明示的に謝罪するように求められてはいない

⇒犯罪の完全な認識と真実の説明が唯一の要件

委員会としては、以上のような方針が被害者・加害者ともに正義の行為や尊厳の回復、負担の軽減として受け入れられると期待されていた

委員会は、申請者に対して過去に受けた不正についてオープンに対話を行うように奨励される

#### 委員会での記録の分析

「文脈に位置付けた倫理判断 (reasoned ethical judgment)」によって真実和解委員会で語られた物語を分析…歴史的な文脈に位置付けた上で「善」／「悪」、「正しい」／「間違っている」という判断を行う、特に語りの背景に「普遍的な人権の仮定」「ネオマルクス主義」のどちらがあるのか分析

分析の結果、アパルトヘイトの経験における不正には、①「植民地的搾取」、②「人間の不可侵性」、③「苦痛と犯罪の認識」、④「罪の告白」、⑤「正義の戦争」という5つの概念カテゴリーがあることが明らかになった

①⑤の背景にはネオマルクス主義の影響、②③の背景には普遍的な人権の仮定があると分析

⇒①～⑤の倫理的な概念は、南アフリカの言語で語られた**歴史的正義**の概念

#### 委員会の取り組みの社会的な影響

歴史的な不正は、TRCの聞き取りの中で明らかにされたが、明らかにするだけで十分であり、司法的な処置は行われなかった

TRCに赦しや謝罪の表現がまれであることは、ツツ大主教を悲しませたが、黒人活動家の間では倫理規定に対し批判

…TRCは正義を和解と引き換えにした、国の利益のために個人の人権を犠牲にしたと主張

委員会の倫理規範は、歴史教育の指針となるように位置付けられる

歴史の教科書には、生徒の過去に共感できるよう聞き取りで明らかになった個人的な語りを掲載

また、黒人と白人の双方の試練に共感するため、地元の人々にインタビューする学習活動が設定

⇒委員会で明らかとなったオーラルヒストリーは、教科書の「虹の思想」の考え方につながる

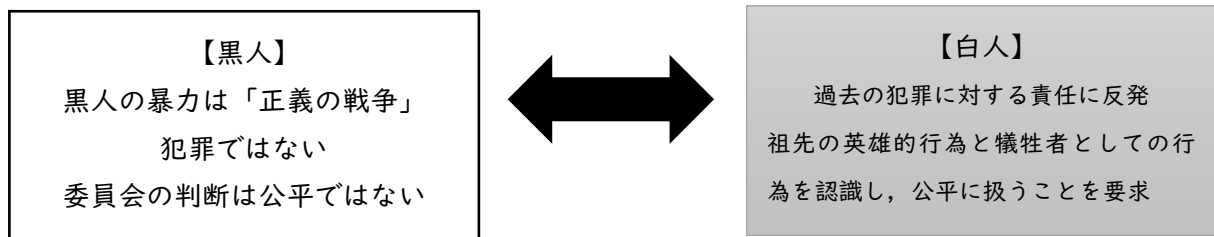
#### 4 歴史的正義が教育における障壁になっている？ (pp.59~61)

歴史教育は、カリキュラムポリシーによって社会集団の歴史的アイデンティティに影響を与える

南アフリカの学校は、以前アフリカーナ人と黒人の学校とに分かれていたが、民主主義への移行とともに終了

移行後の歴史カリキュラム…和解に繋げるために先述したボーア人の物語と植民地時代以降の黒人の物語をともに認識させるもの

しかし、多数派の黒人の視点からみると、社会経済構造の変化は進まず、所得配分が不平等で生活圏は人種的に隔離されたままであるという状態



2010年代に入ると、黒人の若者の社会的・経済的不満は、和解の見込を危うくするほど深刻に急進派の黒人は、正義の十分な回復の認識、赦しを受け入れる代わりに、経済的補償を要求

反ボーアのヘイトトークを復活させ、社会的・経済的革命のための闘いを再開

⇒歴史教育における「虹の思想」は、急進的なポストコロニアル、ネオマルクス主義の解釈へと道を譲るように…学校カリキュラムの「アフリカ化」の進行

⇒結果的に歴史教育では、人種的に隔離されて生活している若者を統合することはできなかった

#### 5 おわりに 社会的記憶の領域における歴史的アイデンティティの変容と歴史教育 (pp.61~63)

社会的記憶と歴史教育は密接に関係している

真実和解委員会で示された「植民地的搾取」「人間の不可侵性」「苦痛や犯罪の認識」といった概念が歴史カリキュラムの中に組み込まれる

しかし、2000年代以降、黒人の社会的記憶が急進的な傾向に変化するにつれて、アパルトヘイトと現在顕在化している社会経済的な問題との連続性を強調

特に急進的なアフリカの若者は、リベラルな和解のための教訓ではなく、過去の不当な慣行との決別と賠償を要求

⇒学校教育は、2度目の挑戦を受けている